うもれ木

魚津埋没林博物館広報誌

第44号

発 行 日：2016年1月31日
編集発行：魚津埋没林博物館
印　　刷：魚 津 印 刷（株）

風雲急を告げる天神山：埋没林の時代の人と社会

天神山城遺跡、山頂部が弥生時代の高地性集落

天神山城出土の弥生土器

2世紀の終わり頃、天神山の山頂に弥生人が続々と避難を始めた。西日本で始まった戦乱が北陸（コシ）の地にも及ぼうとしていた。

新川地域には約2000年前に弥生集落が出現し、佐伯遺跡、経田西町遺跡など低地に集落が形成された。弥生社会は村人が共同で米作りをおこなうのどかな農村と想像されがちだが、考古学的証拠は「血なまぐさい戦乱の世」を示している。狩猟・採集生活の縄文時代には集団による戦いはほとんどなかったと考えられているが、稲作を始めた弥生社会は戦乱と抗争に明け暮れたようだ。

天神山城高地性集落と弥生の戦乱

館　長　麻柄　一志

戦いの記録

三国志魏書烏丸鮮卑東夷伝倭人条（通称：魏志倭人伝）には邪馬台国や女王卑弥呼と並んで2世紀の終わり頃から3世紀の半ばにかけて倭国で戦乱があったことが記述されている。卑弥呼が共立されて女王となるまでの倭国が戦乱状態であったこと、倭国と狗奴国が戦っていること、卑弥呼の死後、男王を立てたが、国中が服さずお互いに殺し合い、この時千余人が殺されたことなどである。短い倭人伝に記録された倭国での三度の戦いはちょうどこの頃、倭が時代の変革期であったことを示している。

集落の防御

紀元前9世紀頃、北部九州に大陸から農業が伝わり弥生時代が始まるが、その初期の段階から集落のまわりを堀で囲んだ環濠集落が出現する。縄文時代の集落は住居自体を環状に配置する環状集落が東日本を中心に認められ、富山平野では魚津市早月上野遺跡が典型的な縄文時代中期～晩期の環状集落として知られている。しかし、縄文時代は集落の周りに堀を掘り、敵から村を守ろうとした痕跡はない。富山平野では環濠集落の類例は少ないが、富山市新堀西遺跡（弥生時代後期）が集落の周りに濠めぐらしている。

環濠集落と並んで、防御性の高い集落が高地性集落である。高地性集落は平野に面した山頂に設けられた集落で、西日本では弥生時代前期から存在するが、弥生時代後期には福井県から新潟県までの北陸地方にも広がる。天神山山頂もこの高地性集落である。天神山は戦国時代末期、越中を舞台に織田勢と上杉勢が激突した際、上杉景勝が本陣を敷いた山城として知られている。山頂部に本丸、その一段下に二の丸が設けられた典型的な戦国期の山城である。この本丸部分から弥生時代後期の土器片が出土している。正式な発掘調査はおこなわれておらず、住居跡や濠などの遺構は確認されていないが、ほぼ同じ時期の富山市白鳥城遺跡では発掘調査で山頂から竪穴住居、斜面部から濠（空堀）の一部が発見されており、天神山城も山頂部には住居跡が、さらに住居跡を取り囲むように濠がめぐらされている可能性が高い。

片貝川右岸の河岸段丘（天神野台地）最奥部に標高163mのお椀形の独立丘陵がある。天神山である。山麓の段丘面からの比高差約60m、片貝川扇状地面からの比高差は約90mを測る。天神山の山頂まで、実際歩いてみると台地側から登っても息が切れる。現在扇状地から直接天神山に登る道はないが、日常的に登り降りするには個人差はあろうがかなり体力的に困難である。

天神野台地は江戸時代に高円堂用水が造られるまで稲作はおこなわれておらず、弥生時代の生産基盤は片貝川扇状地または布施川扇状地（こちらからの比高差は約140m）に水田が開かれたと考えられる。居住地（天神山山頂）と生産

基盤（扇状地）までの高低は尋常ではなく、元気な弥生人であってもかなりの苦労があったと考えられる。扇状地の洪水を恐れるなら、天神野台地上に集落を構えれば、充分対応できる。それをあえて天神山山頂に住むことは、天神山山頂が一般的なムラではなく、弥生時代の山城として機能していたからであろう。天神山の山頂に人が住んだのは弥生時代後期と戦国時代末期の2回のみである。同じく高地性集落である富山市城山山頂（白鳥城）も人が居住したのは弥生時代後期と戦国時代の2回である。白鳥城は豊臣秀吉の佐々成政攻めの前線となった山城で、こんな戦でもなければ人が住むような場所ではない。弥生時代後期の白鳥城遺跡は環濠の存在も明らかなので弥生時代の山城と考えて間違いはない。北陸地方の弥生時代後期の高地性集落は発掘調査がおこなわれたほとんどの遺跡で集落をめぐる環濠が確認されており、一部には土塁も存在し堅牢な山城として構築されている。

武器・防御具

弥生時代の武器としては、縄文時代からそのまま使い続けられる石鏃のほかに、弥生時代になって戦い用として出現する石剣、短甲、楯などがある。石鏃は有茎式のものが多いが、北陸地方では近畿・瀬戸内地方のように大量に出土することはない。高岡市下老子笹川遺跡では2棟の弥生時代中期の住居跡から3点の磨製石剣が出土している。

弥生時代には石器のほかに金属器（鉄や銅）の武器も使われ、富山平野でも墓などから金属製武器が出土しており、本来は集落にも存在した可能性は高いが、腐食して発見できないのであろうか。磨製石剣は金属製品を模倣したものであろう。

西日本の弥生時代遺跡では墓地の調査で人骨が出土することがある。頭部のない人骨、石剣や銅鏃が刺さったままの骨、全身に石鏃が撃ち込まれまま埋葬された遺体など、戦いの悲惨さを物語っている。

白鳥城遺跡　　水田からの比高差130m

こうした武器に対する防禦具としては弥生時代になって木製の盾と甲（よろい）が出現する。氷見市惣領浦之前遺跡で弥生時代後期の木製の盾が17点も出土している。また肩甲（かたよろい：肩の部分を保護する）と考えられる木製品も出土している。日本海側で最大規模の縄文時代前期の貝塚で知られる富山市小竹貝塚の南東部で、弥生時代後期の溝の中から木製盾の一部が出土している。

短甲は高岡市江尻遺跡から一木からの刳り抜き式が出土している。周辺からは弥生時代終末の土器が出土しており、この短甲も同時代と考えられている。盾や甲は低湿地遺跡など、木製品の保存に適した遺跡でしか出土しない。本来数多くの遺跡で残された可能性が高い。

おそらくこの時代の最も普遍的で有効な武器は投弾（つぶて）であった。新潟県上越市裏山遺跡（弥生時代後期の環濠を持つ高地性集落）からは自然石の投弾が多数出土しており、この遺跡では投弾が最も多い武器であった。手のひらに収まる程度の大きさの自然礫で、投げやすそうな石が選ばれている。こうした投弾は弥生時代だけでなく、南北朝期から近世初期の城攻めでも籠城側の有効な攻撃手段であったことが様々な史料に見える。たとえば江戸時代初期のキリシタン弾圧事件であった島原の乱では城攻めをおこなった幕府側の被害の多くが場内からの投石によるものであった。平地の戦でも「つぶて」は多用されていた。

天下無敵の武田信玄の軍勢は石投げ隊を組織しており、合戦の口火は投石によって切られることがあった。このように伝統的に戦に用いられた「つぶて」だが、その認定は困難である。なにしろ加工痕のない自然石のため、遺構内からまとまって出土するなど特殊な状態で発見されないと見逃されがちである。天神山城や白鳥城の散策でこうした「つぶて」を発見できるかもしれない。

埋没林博物館周辺が大森林に覆われていた頃、この地に住む人々は戦渦におびえていた。この戦が北陸地方内の村々の抗争であったのか、ヤマト対コシといった地域間戦争であったのかは定かではない。また、天神山周辺で、実際に戦いがあったのか、それとも戦いに備えただけであったのかもわかっていない。しかし、武器や防御具、環濠集落、高地性集落の存在から富山平野でも弥生時代後期になんらかの抗争があったことは容易に想像できる。

シリーズ

埋没林の仲間たち ㊸
ミツガシワ（ミツガシワ科）

ミツガシワの葉（魚津市内で撮影）

ミツガシワは、冷涼な地域の池沼に生育する多年草です。柏餅を包むカシワというドングリの仲間の木がありますが、親戚ではありません。また他の植物でも○○ガシワというのがありますが、互いに類縁関係がない場合が多いようです。

“カシワ”というのは、昔食物を盛るのに使った大きな葉を意味した言葉だそうです。しかしミツガシワはどこでも手に入る植物ではなく、また葉が3枚に分裂しているので食物を盛るのには適さないと思われます。カシワの木の葉を3枚合わせた“三つ柏”の家紋に似ているのが名前の由来のようです。

三つ柏の紋

魚津埋没林の1989年の発掘調査でミツガシワの種子が多数出土しています。現在の魚津市内では、丘陵地帯のただ1箇所に生育しています。富山県では山地にまれに生育し、かつて黒部市の海岸近くでも生育していましたが、現在は県内の平野部からは姿を消しています。

ご利用案内

- ○開館時間　午前9時～午後5時（入館は4時30分まで）
- ○休館日　年末年始（12月29日～1月1日）
- ○入館料　・大人（高校生以上）…520円　・小中学生…260円
- ○交通　・あいの風とやま鉄道魚津駅／・富山地方鉄道 新魚津駅　下車1.5㎞（タクシー・・・5分／徒歩・・・25分）
- ・北陸自動車道魚津ICから3㎞車で10分

特別天然記念物 魚津埋没林博物館

〒937-0067 富山県魚津市釈迦堂814☎(0765) 22-1049
ホームページ　http://www.city.uozu.toyama.jp/nekkolnd/
e-mail　nekkolnd@city.uozu.toyama.jp